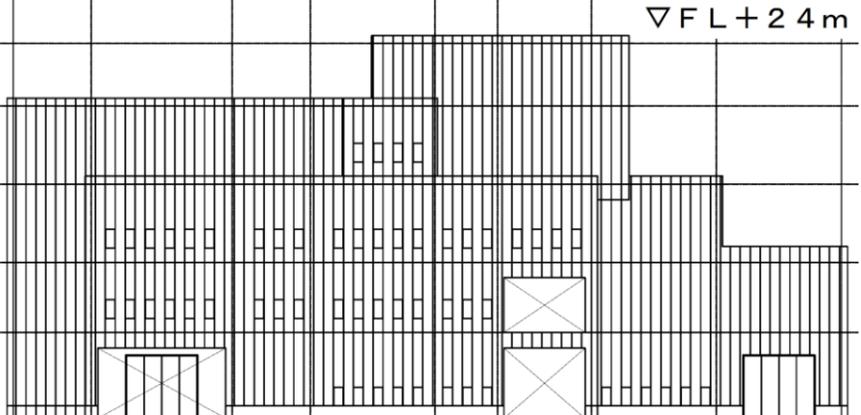
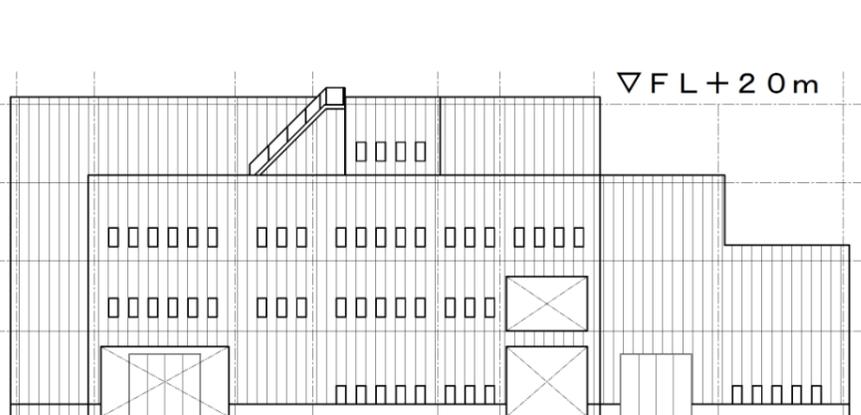
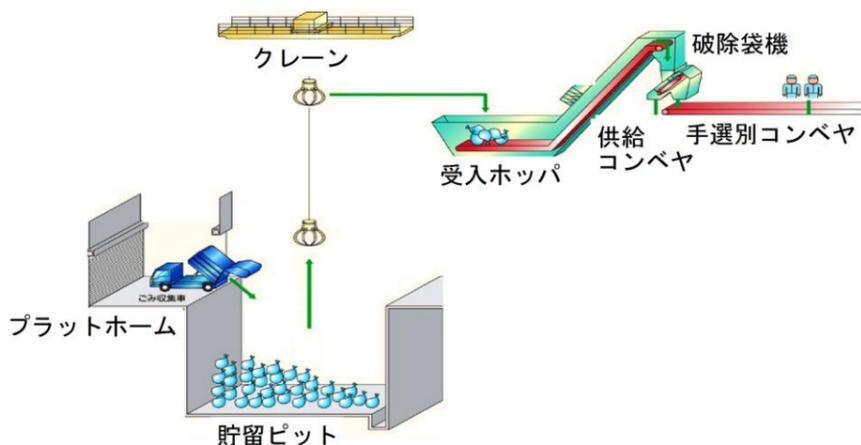
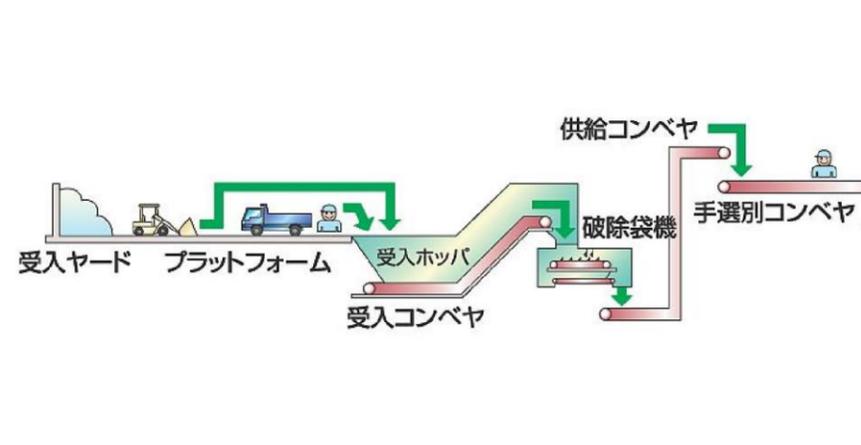
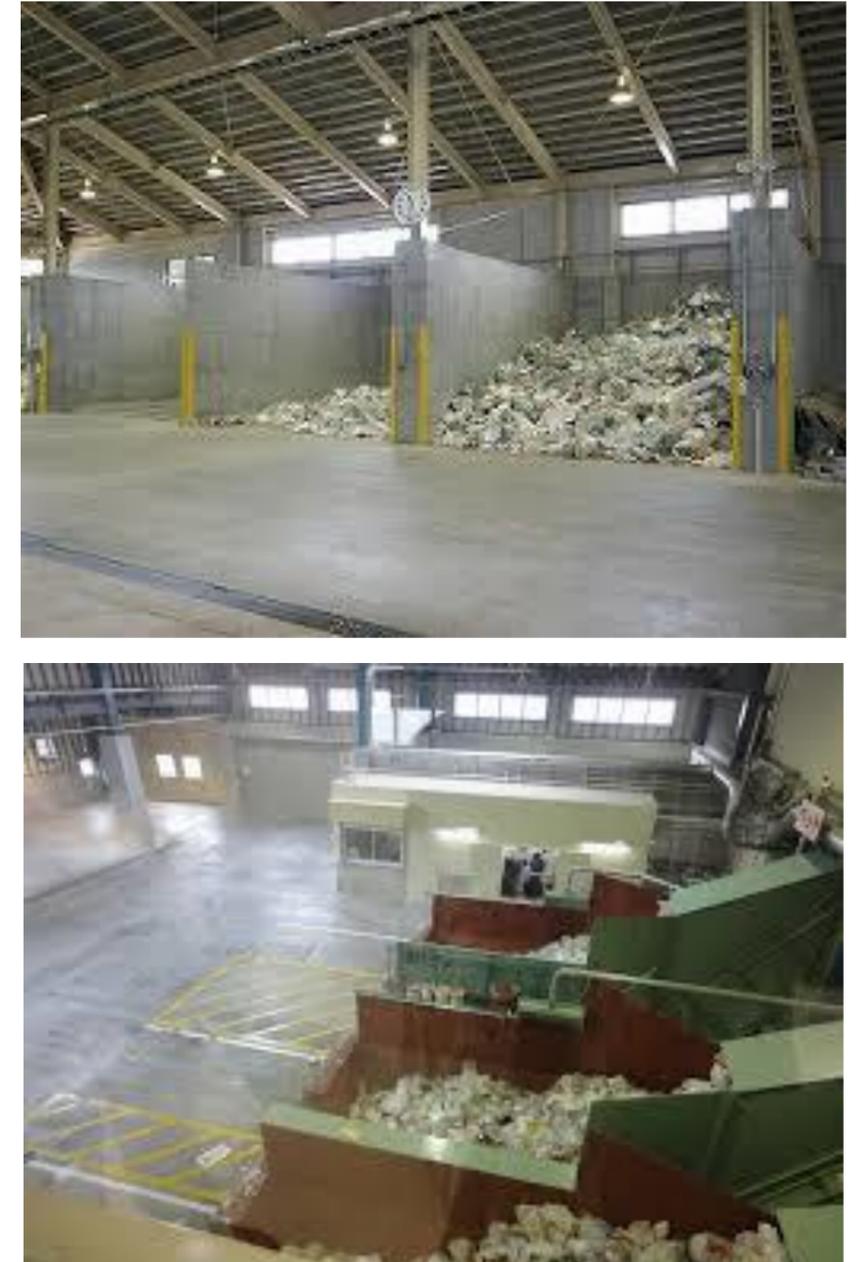


受入方式の比較表 (1/3)

項目	ピット式	ヤード式
立面		
フロー (受入供給部)		
参考例		

受入方式の比較表 (2/3)

項目	ピット式	ヤード式
配置案 1階	<p>ピット式 1階配置案</p>	<p>ヤード式 1階配置案</p>
2階	<p>ピット式 2階配置案</p>	<p>ヤード式 2階配置案</p>
3階	<p>ピット式 3階配置案</p>	<p>ヤード式 3階配置案</p>

受入方式の比較表（3／3）

項目	ピット式	ヤード式	
概要	地下に掘ったピット（壕）に、搬入した処理対象物を投入し、天井クレーンを使用して受入コンベヤへの供給を行う。	平坦な床に搬入した処理対象物を下ろし、ホイールローダで積み上げや受入コンベヤへの供給を行う（受入コンベヤへの直接投入も考えられる）。	
安全性	プラットフォームの通行は搬入車両のみであるため、交通安全の確保が容易であるが、ごみピット投入時の転落防止の措置が必要である。	収集車とホイールローダの動線が交錯するため、安全確保のため、交通誘導員の配置や作業エリア及び作業時間帯の設定が必要である。	△
臭気対策	ごみピットを投入扉で区画することにより、搬入扉と合わせて処理対象物から発生する臭気対策を二重に行うことができる。	貯留ヤードをプラットフォームと区画することは困難であるため、搬入扉による一重の対策のみとなる。	○
不適物対策	投入前に不適物の排除ができない。	投入前に不適物の確認、排除ができる。	○
設置面積	ピットを深く掘ることにより、処理対象物の必要貯留量を確保しつつ設置面積を小さくできる。	積上げ高さが制限される（3～4m程度）ため、処理対象物の貯留に広い設置面積が必要となる。（敷地に制約がある場合、プラットフォームに十分な余裕が確保できない。）	△
機器配置	ピット部は吹き抜けとなり、供給コンベヤのホッパ部とも平面的に競合することから、機器配置上の制約が大きい。	機器配置上の制約はあまりない。	◎
清掃の容易性	プラットフォームには、ごみの滞留はなく常に清掃が可能で衛生的である。 一方、ピット内の処理対象物を全て掴み取ることが困難で、残分が発生する。	床面の清掃が容易にできる（ヤード内の処理対象物を全て処理した場合）。	◎
操業面	ピット内に貯留することにより、搬入量の変動を吸収することが出来、安定した運転を行える。 大容量の貯留が可能であり、故障停止時の貯留に有利である。	即日処理が原則であり、搬入量の日変動や季節変動への対応は、運転時間の延長等で対応する必要がある（ヤード内貯留で対応する場合は臭気対策が必要：上記臭気対策の項参照）。 大容量の貯留は困難であることから、故障停止時の貯留に配慮する必要がある	△
建設工期	ピット部が大深度の掘削となる他、投入扉やクレーン階が必要となるため、工期を要す。	ホッパ部のみ浅い掘削が必要以外、特別な構造を要しない。	◎
建設費	ピット部、クレーン、投入扉の費用が嵩む。	ホイールローダを購入する必要がある。	◎
維持管理費	クレーン、投入扉のメンテナンスが必要となる。	ホイールローダの保守が必要となる。	○
景観	クレーン階が必要となるため、比較的高層となる。	プラットフォームの出入口から、搬入（貯留）物や受入供給作業が外部から見える可能性がある。	○

【凡例】◎：優れる、○：普通、△：劣る